

専門的職業へ向けた省察的実践の支援 —自己評価表から学修目標・達成ポートフォリオへ—

平野 俊英

理科教育講座

Supporting Reflective Practice towards the Profession: From Self-Assessment Sheet to Learning Goals & Achievement Portfolio

Toshihide HIRANO

Department of Science Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. 本学教育学部の養成教育の現状と課題

1. 本学教育学部の専門的職業人養成と省察機会

愛知教育大学教育学部は令和3年度に改組を行い、学校教員養成課程と教育支援専門職養成課程の2課程から構成される学部となった。学校教育が抱える現代的課題の解決へ向けて必要となる、実践力等の社会性や知識・技能等の専門性を獲得した専門的職業人の養成を目指している。学校教員養成課程の幼児教育、義務教育、高等学校教育、特別支援教育、養護教育の5専攻では、各々が対応する校種や幼児・児童・生徒の多様な実態に応じて求められる専門性は異なっている。また、教育支援専門職養成課程の教育ガバナンス、心理、福祉の3コースでも、各々が職業に関連して獲得を目指す資格（受験資格も含む）やその構成領域、クライアントとなる多様な方々の実態は大いに異なるものと考えている。

本学はディプロマ・ポリシー（DP）において、学生が教育課程の履修を通じて獲得を目指す卒業時の姿を規定しているが、さらにその姿の到達へ向けた対策として、第4期中期計画のNo.8に掲げる「各専攻・コースがめざす専門的な知識修得と実践力の向上へつなげるために、教職や教育支援専門職に求められる普遍的なスキル・リテラシーの育成成果の可視化を行い、学生の自覚的な学修活動を促す指導・支援を推進する。」に基づく取組を行い、評価指標8-2に掲げる「学修振り返りアンケートにおける4年間の学生の自己効力感の変動を踏まえて学修支援策を策定した後に、成果向上をめざして自覚的に学修活動へ取り組めた学生の割合（目標：卒業時に実施するアンケート結果 最終年度までに90%以上）」を実現していくとしている。4年間にわたり、個々の学生に省察機会を与え、専門

的職業人へ向けた成長状況を可視化することで学生の学修に対する自己効力感を高める支援を授業担当教員や指導教員がコミュニケーションを通じて適時かつ適切に行うとともに、併せて本学教育学部の教育課程や教育体制の質的向上を図ることを目指すという構想である。令和4年4月にNTTデータ九州のLive Campus Uへのシステム更新が行われた本学の「学務ネット」において、新規追加となった教育支援（eポートフォリオ）機能の利用により実現環境が用意できると判断した上での、中期計画ならびに評価指標の設定となっている。

第4期中期目標・中期計画期間の期初にあたる令和4年4月の段階において、教育学部の課程ごとでは、次のような課題を抱える状態にあった。

(1) 教職に向けた養成での省察機会の不足や遅れ

教職課程では「教職実践演習」の実施に際して、履修カルテを用いた指導が導入されている。本学でも改組以前の教員養成4課程においてこれまで、担当教員が評価する教職課程内の授業科目の「成績」や「未達成の設定観点」の情報と、学生自身が評価する「自己評価表」への記入情報から履修カルテを構成しており、これらに基づく演習が教職実践演習で行われている。学務ネットで管理される「成績」は科目履修 Semester末に学生へ開示される一方で、「未達成の設定観点」については教職実践演習の開始時に紙媒体で学生に提供されることや、設定観点は科目に1~2項目と様々で授業担当者が積極的に指摘しにくい状況から、教職実践演習の開始時に4年間の学修を総括的に示す情報源となり得たかもしれないが、期待されるほどの自覚的な学修活動の取組みを演習の履修期間に持たれる効果は得られなかった。また、「自己評価表」については、3年次の後期教育実習（初めての実践）の実施後と4

年次の教職実践演習の履修開始時の2回、約1年間隔で記入する設定であり、一部学生はこの間に副免実習を未実施の場合もあるため、実践による変化が得られず、学生の振り返り機会が不足気味であった。平成29年度から共通科目へ教師教養科目の枠を設け、1・2年次に「実践力育成科目」による実践や「現代的教育課題対応科目」による知識の拡充を図る教職課程の改善を行う一方で、履修カルテは小修正のみで現状維持としてきた。したがって、大学での授業科目による専門的な学修と学校体験活動や教育実習での実地での実践による学修との間で期待される往還的な学びの実現やそれによる成長の状況を把握するには至っていない。

(2) 教育支援専門職に向けた養成での省察機会の欠如

3つのコースにも、大学での専門的な学修と実地での実践による学修があり、相互間の往還的な学びの実現は期待される場所ではあるが、現状として教職課程の履修カルテのような振り返りに基づく活動を正課では用意できていない。実習の事後指導時に担当教員から全体指導を受けるか、卒業研究のゼミ活動において、指導教員による個別支援を受けるかにより行われているものとする。教職課程と同様に、特に「自己評価表」にあたるような学生自身が評価を行う活動を導入し、彼らの授業科目の成績やGPA値の状況だけでなく、学修意欲についても併せて把握することにより、組織的に学生支援に努める意義はあると考えられる。

2. 本学の教職課程における「自己評価表」の構成

本学教育学部の教職課程において現在使用している「自己評価表」の様式は、2種類ある。3年次後期の教育実習終了後に学生が記入する「実習を振り返って(自己評価表Ⅰ)」と、4年次の教職実践演習の履修開始時に学生が記入する「授業を振り返って(自己評価表Ⅱ)」である。いずれもA4版2ページからなる様式で、学生の基本情報の他に、次の(1)～(4)に示すような、教師に求められる4つの項目(本稿では幼稚園・小学校・中学校・高等学校教諭の教職課程向けの項目名で示す)が示され、これらが十分に理解できたかどうかを自由記述によって回答する形式となっている。なお、これら4つの項目は平成18年7月の中央教育審議会『今度の教員養成・免許制度の在り方について(答申)』で例示された教職課程の到達目標や確認指標の事例に基づき、本学が定めたものである。各項目の説明として、項目が含む詳細事項として3～4つの「問い」を例示しており、併せて項目について学ぶことのできる授業科目(本欄では平成31年度・令和2年度入学生の教職課程での授業科目名・授業科目枠名)が示されている。

(1) 使命感や責任感、教育的愛情等

[項目詳細]

①教職の意義や教師の役割・職務内容について、どの

ようなことを理解していますか。

②教育についての理念や歴史、思想について、どのような知識を身につけていますか。

③学校教育の社会的・制度的な性質や保護者、地域との連携の重要性についてどのように理解していますか。

[学ぶ授業科目]

教師論、教育原論、教育システム論、学校体験活動、教育実地研究

(2) 社会性や対人関係能力

[項目詳細]

①子どもの性格・性別の違いをどのように理解し、どのように接しましたか。

②連絡帳や日誌、作文などに書かれたことをどのように解釈し、どんなことに気をつけて朱書きをしましたか。

③教職員集団の中で、必要に応じて相談したり、依頼したり、依頼を断ったりすることができますか。また、そのときにどんなことに配慮しましたか。

[学ぶ授業科目]

教師論、教育システム論、学校体験活動、教育実地研究

(3) 幼児児童生徒理解や学級経営等

[項目詳細]

①子どもの発達・学習や授業に関する心理学的知識について、どのようなことがわかりましたか。

②教科以外の教育活動の意義・課題および具体的な指導法についてどのようなことがわかりましたか。

③子どもの問題行動を捉える際の視点、方法、留意点について、どのようなことがわかりましたか。生徒指導と相談の両側面から、まとめてください。

[学ぶ授業科目]

現代的教育課題対応科目、発達と学習の心理学、特別活動の理論と方法、幼児の理解と指導、生徒指導・進路指導の理論と方法、教育相談の理論と方法、学校体験活動、教育実地研究

(4) 教科・保育内容等の指導力

[項目詳細]

①道徳教育の指導法について、どのような知識を身につけていますか。

②特別活動の指導法について、どのような知識を身につけていますか。

③教える方法を複数思い描くことができますか。

④教科や保育の指導の構想・実践・評価(反省)についての課題をどのように自覚していますか。

[学ぶ授業科目]

道徳教育の理論と方法、特別活動の理論と方法、教育課程論、教育の方法と技術、総合的な学習の時間の指導法、教科教育法科目、保育内容指導法科目、教科内容科目、保育内容科目、学校体験活動、教育実地研究

3. 自覚的学修へ向けて学修振り返りに必要な要素

前節で示した教職課程の「自己評価表」では、3年

次後期に主免獲得へ向けた必修の「教育実習」を学生において主要な実践の機会として重視し、その前後の大学での授業科目履修との関係性に焦点を当て、学生に学修成果を表現させる形式であった。その後、学部の教育課程へ「実践力育成科目」が平成29年度に導入され、学校ボランティア等による体験活動が必修で追加されたものの、自己評価表においてこれを専門的職業に向けた実践の機会としては位置づけずいた。往還的な学修振り返りを最小限に抑えた運用であったと言わざるを得ない。

この実態を踏まえ、令和3年度の学部改組では学校教員養成課程と教育支援専門職養成課程のいずれも、共通教育科目で履修が展開される実践力育成科目を、学生のキャリア形成において重要な子どもやクライアントの理解と、主体的な行動を促す実践力の育成を行う目的の実践の機会に位置づけ、専門的職業に向けた実習科目の基礎として連動させることで、学生の実践を4年間の積み上げで捉えることとした。このほか、学校教員養成課程ではさらに、複数種の教員免許状の取得に学生の選択意識を重視した履修指導を行う方針を立て、かつ、「教育実践開発科目」として実習科目の系統的な枠組みを用意することで、これまで一部学生に履修回避傾向の見られた4年次前期の教育実習の参加意欲を高め、更なる実践の機会を確保させるほか、「学生独自に抱える課題の解決」を促す仕組みを教育実習の事前・事後指導や教職実践演習の開設長期化と併せて構築し、学生による省察的実践の支援体制を用意することとした。

このような教育課程上の配慮を踏まえつつ、4年間の在学期間に複数回の学修振り返り機会を計画して実施させることで、2つの課程の学生に自己効力感の意識変動とその対象事項を明確に確認させ、それにより得意や苦手の分野における自覚的な学修の出現へ貢献できるように支援を行うことが必要である。そのため、学修振り返りに含める必要がある要素を、本学で現在稼働中の学務ネットの教育支援機能の枠組みの中で設定可能な事項にあわせて、次の通り定めることとする。

(1) 学修目標を設定して達成を追跡する文脈の導入

あらかじめ課程ごとに定めておいた評価項目及びその詳細事項に対して、入学後のセメスターにて実施する初年次演習などの機会を通じて、卒業時の専門的職業に就いた自分の姿として「学修目標」に設定するレベルを学生がシステムに登録する。なお、卒業時点でその専門的職業で標準的なレベルを基準に掲げておき、それを参考に設定してもらう。学修の振り返り時には、自ら掲げた目標に対してどの程度接近できたのか、達成度をもとに学生はシステムへ登録することとする。

(2) 年1回の実践活動後と最終セメスターの累積実施 学校体験活動や専門的職業に向けた実習科目は概ね

年1回の間隔で用意されていることから、学修振り返りの機会はこれら実践の機会の後に必ず設定することとして、これに加えて4年次の最終セメスターにも総合的な振り返りの機会を設定し、システムへの登録を実施することとする。

(3) 数値尺度による回答の規格化で変動履歴の可視化

学修目標として学生が定める程度や、それへの達成度を学修振り返りごとに可視化するために、学生の考えと数値尺度による回答との対応関係を意識させることによって規格化を行わせる。学生の登録内容の変遷から個人内の変動幅や変動履歴の提示ができるため、彼らの成長の姿として認識させて自己効力感を高めさせる機会とすると共に、更なる成長へ向けた自覚的な学修に取り組む契機とすることへ繋げる。

(4) 成長に向けた学生の自由記述と指導教員コメント

学生は数値尺度によって学修目標への達成度をシステム登録するのにあわせて、自身が捉える成長事項や今後の取組事項を具体的に自由記述によってシステムに入力させる。これら学生のシステム登録情報に基づいて、指導教員は成長に向けた教育の質保証の観点から学生向けコメント記入欄にアドバイスを記載することで、学生の自覚的な学修の出現や維持、高度化を支援するためのコミュニケーションに努めることとする。

II. 本研究の目的と方法

1. 研究の目的

本研究は令和3年度の本学教育学部改組で教育課程を見直した、専門的職業人の養成を行う2つの課程において、それぞれの学生が授業科目の知見と実地の体験活動や実習での経験を繋ぎ合わせて行う省察的実践を支援して、彼らの自覚的な学修の出現が広く実現させるために、4年間の継続的・累積的な学修振り返りを進めさせる「学修目標・達成ポートフォリオ」を個人的に開発し、大学へ提案することを目的とする。

2. 研究の方法

既存の教職課程における紙媒体の「自己評価表」の設定構成や運用経験を基に前章で考えた改良点を踏まえ、まずはシステム更新後の学務ネットの新機能を利用したWEB媒体のeポートフォリオ・システムを教育学部の2課程へ導入することを前提とする。そして、学校教員養成課程向けの「学校教員に向けた学修目標・達成ポートフォリオ」における評価項目の構成や評価方法を定めて開発する。その後、教師と比べた時の専門的職業の違いや教育課程の違いに配慮をしたうえで、教育支援専門職養成課程向けの「教育支援専門職に向けた学修目標・達成ポートフォリオ」における評価項目や詳細事項の構成について、ディプロマ・ポリシーや学校教員養成課程向けの詳細事項の内容を援用

しながら検討することで定めて開発する。

Ⅲ. 学校教員養成課程向けの 学修目標・達成ポートフォリオの開発

1. 4つの評価項目について

学校教員養成課程向けのeポートフォリオでは、「自己評価表」に使用していた4つの評価項目をそのまま割り当てることとした。ただし、「自己評価表」は【幼稚園・小学校・中学校・高等学校教諭用】と【養護教諭用】の2種あったものを1つに包括するよう考えたため、次のような評価項目名として位置づけし直した。

- (1) 使命感や責任感, 教育的愛情等
- (2) 社会性や対人関係能力
- (3) 幼児児童生徒理解や学級経営／保健室経営等
- (4) 教科・保育内容等の指導力

なお、4つの評価項目について総括して目標や達成度を数値尺度で直接回答することはないが、評価項目を構成する詳細事項での回答数値を加工して「項目代表値」を用意し、項目間で吟味することは可能であると考えられる。また、学生による自由記述は「自己評価表」のように評価項目ごとに回答を踏まえて記述させることを念頭に置いている。

2. 評価項目にあげる詳細事項について

「自己評価表」では3～4つの問いが詳細事項に用意されていたが、eポートフォリオでは達成度を数値尺度にて回答させる方法へ変更となるため、理解や能力獲得について「～している」と表記する形へ変更することにした。平成18年7月の中央教育審議会『今度の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』で例示された教職課程の到達目標や確認指標の事例に立ち返ると共に、本学の授業科目の学修内容や学校体験活動での実践との繋がりにも考慮して、詳細事項の設定内容を見直し、各評価項目に対して3つずつ配置し、全12事項それぞれに対して学生は目標や到達度を回答することとした。各評価項目の詳細事項は次に示す通りである。

(1) 使命感や責任感, 教育的愛情等

1-1 教育への使命感や情熱を持ち、子どもから学び、共に成長する姿勢が身に付いている

1-2 子どもの成長や安心・安全、健康に対して教員が担う責任の重さを理解している

1-3 高い倫理観と規範意識、強い意志を持ち、自己の職責を果たす姿勢を持っている。

(2) 社会性や対人関係能力

2-1 社会人としての基本（挨拶、言葉遣い等）が身に付いている

2-2 他の教職員と協力した校務運営の重要性を理解している

2-3 保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している

(3) 幼児児童生徒理解や学級経営／保健室経営等

3-1 学級担任や養護教諭に求められる役割や態度、実務等を修得している

3-2 個々の子どもの特性や状況を把握し、課題に対応する手法を修得している

3-3 子どもと信頼関係を築き、規律ある集団にまとめる手法を修得している

(4) 教科・保育内容等の指導力

4-1 教員としての表現力や、授業力・保育力を身に付けている

4-2 子どもの反応を活かした指導法、協働する姿勢を育む指導法等を身に付けている

4-3 教材・教具、学習形態、指導と評価等、学習指導の基本（知識・技能）を身に付けている

3. 数値尺度とシステム登録機会の設定について

eポートフォリオ・システムで用いる数値尺度としては「1から10まで」の10段階尺度を用いる設計で考えた。このうち、7の値を「教員採用時に教育委員会が採用者に求める水準」であると学生に基準を明示したうえで、この数値よりも上下に十分な尺度の余白を用意することで、学修の目標や達成度として学生が自己分析して回答する幅を確保するようにした。なお、4年間で学生がeポートフォリオへ学修目標や学修達成を登録する機会としては次の通りとした。いずれの登録機会も学生の作業で終わるのではなく、学生と指導教員の間でeポートフォリオや履修科目の成績・GPA値、学校体験活動や教育実習の記録等の情報も参照しながらWEBや対面にてコミュニケーションを行い、学生指導を充実させることとしたい。

- (1) 入学時（初年次演習）の学修目標の登録
- (2) 1年次終了時の学修達成の登録
- (3) 2年次終了時の学修達成の登録
- (4) 3年次後期教育実習終了時の学修達成の登録
- (5) 4年次前期教育実習終了時の学修達成の登録
- (6) 4年次教職実践演習時の学修達成の登録

4. 授業科目との対応について

4つの評価項目に対応する教職課程の授業科目を学生に示すため、履修授業科目の成績情報に基づかせて学生には学修達成度の判断を行わせることになる。評価項目に対応する授業科目は次に示す通りである。（令和4年度の教職課程の小改正に伴う追加科目には右肩に*を記す。）

(1) 使命感や責任感, 教育的愛情等

教師論, 教育原論, 教育システム論, 学校体験活動, 学校教育実習, 教育実践開発科目

(2) 社会性や対人関係能力

教師論, 教育システム論, 学校体験活動, 教育実践開発科目

(3) 幼児児童生徒理解や学級経営／保健室経営等

現代的課題対応科目, 発達と学習の心理学, 生徒指導・進路指導の理論と方法, 幼児の理解と指導, 教育相談の理論と方法, 学校体験活動, 教育実践開発科目

(4) 教科・保育内容等の指導力

教育課程論, 保育内容科目, 教科内容科目, 教育の方法と技術, 学校教育におけるICT活用*, 保育内容指導法科目, 教科教育法科目, 道徳教育の理論と方法, 総合的な学習の時間の指導法, 特別活動の理論と方法, 教育実践開発科目

IV. 教育支援専門職養成課程向けの

学修目標・達成ポートフォリオの開発

1. 4つの評価項目について

教育支援専門職養成課程向けのeポートフォリオでは, この課程のDPにおける項目の設定に基づかせることで, 次のような評価項目を位置づけた。

- (1) 教育を支える専門職の基礎的資質能力と実践的指導力
- (2) 同僚・保護者・地域社会等と連携し協働する態度
- (3) 自己を振り返り, 絶えず向上心を持って学び続ける姿勢
- (4) コースごとの評価項目

なお, 4つの評価項目のうち(1)～(3)については, 学校教育教員養成課程の評価項目と同様に, 評価項目を構成する詳細事項での回答数値を加工して「項目代表値」を用意し, 項目間で吟味することは可能であると考えられる。(4)については, 3つのコースごとに1つずつ詳細事項を用意する形式としたため, 項目代表値の取扱いは無い。また, 学生による自由記述は評価項目ごとに回答を踏まえて記述させることを念頭に置いている。

2. 評価項目にあげる詳細事項について

教育支援専門職養成課程のeポートフォリオでも, 達成度を数値尺度にて回答させる方法へ変更となるため, 理解や能力獲得について「～している」と表記する形へ変更することにした。学校教員養成課程で設定した詳細事項の内容も対応可能な場合には援用させながら, 各評価項目に対して3つずつ詳細事項を配置し, コースごとに対応する10事項に対して学生は目標や到達度を回答することとした。各評価項目の詳細事項は次に示す通りである。

- (1) 教育を支える専門職の基礎的資質能力と実践的指導力

1-1 子ども・保護者等の問題に教養と市民感覚で

対応する力が身に付いている

1-2 個々の子どもの特性や状況を把握し, 課題に対応する手法を修得している

1-3 基礎知識技能を持って多職種連携し, 諸課題に取り組む力が身に付いている

(2) 同僚・保護者・地域社会等と連携し協働する態度

2-1 社会人としての基本(挨拶, 言葉遣い等)が身に付いている

2-2 他の同僚と協力した職務運営の重要性を理解している

2-3 保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している

(3) 自己を振り返り, 絶えず向上心を持って学び続ける姿勢

3-1 教育支援への使命感や情熱を持ち, 子どもから学び, 共に成長する姿勢が身に付いている

3-2 子どもの成長や安全・安心, 健康に対して教育支援専門職が担う責任の重さを理解している

3-3 高い倫理観と規範意識, 強い意志を持ち, 自己の職責を果たす姿勢を持っている

(4) コースごとの評価項目

4(心理) 心理の基礎から応用までを学び, 心理支援において課題を解決する力が身に付いている

4(福祉) 人と環境に焦点を当て, 子どもや家庭・地域の課題を理解し, 社会資源を活用しながら当事者と共に課題を解決する力が身に付いている

4(教育ガバナンス) 公益的な教育や行政の様々な調整や戦略的企画の立案・推進を通して, 学校・地域等の課題を解決する力が身に付いている

3. 数値尺度とシステム登録機会の設定について

eポートフォリオ・システムで用いる数値尺度は学校教員養成課程と同様に「1から10まで」の10段階尺度を用いる設計とし, このうち7の値を「採用時に受入機関側が採用者に求める水準」であると学生に基準を明示する。なお, 4年間で学生がeポートフォリオへ学修目標や学修達成を登録する機会としては学校教員養成課程に準じるが, 3年次以降についてはコースごとの実習科目の設定や卒業研究活動に合わせた調整を行うこととした。

- (1) 入学時(初年次演習)の学修目標の登録
- (2) 1年次終了時の学修達成の登録
- (3) 2年次終了時の学修達成の登録
- (4) 3年次(実習)終了後の学修達成の登録
- (5) 4年次前期(実習)終了後の学修達成の登録
- (6) 4年次卒業研究提出時の学修達成の登録

4. 授業科目との対応について

4つの評価項目を教育支援専門職養成課程のDPにおける項目の設定に対応させたことから, 大学が学生

に対して授業科目の成績情報を加工して提示する準備を進めている「DP達成に向けた学修評価指標」の数値に基づかせて学生には学修達成度の判断を行わせることになる。ただし、「教育を支える専門職の基礎的資質能力と実践的指導力」に対する学修評価指標は2つ、それ以外の項目に対して学修評価指標は1つが対応するのみであるため、詳細事項の数値尺度の選択に際しては判断に困ることもあったと考えられる。平野(2022)で示した学修評価指標の算出用のDP-CP対応表において強い重み付け(◎印)を付した授業科目群を示して、学生にその授業科目の成績情報も参照させることで対応を考えさせたい。

V. 本研究成果の運用化と今後の課題

令和4年度に新設した教務企画委員会系の専門委員会において、本稿にて開発を行った教育学部2課程の学修目標・達成ポートフォリオは提案されて審議に付される。最終的に成案されたものが、学務ネットに実

装され運用に入ることとなる。運用によって、学部における学生指導の在り方は大きく見直されることになるとともに、大学教育の質的な向上が期待される。学生に自覚的な学修が実現する取組となるように、丁寧な実施をしていくとともに、学生の回答データの分析結果に基づいて適正な調整が行われるように働きかけていくことが運用上において肝要であると考えている。

引用・参考文献

中央教育審議会、『今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)』, 2006年.

平野俊英, 「ディプロマ・ポリシー達成に向けた学修評価指標の開発 -学修評価システム構築に向けて-」, 『愛知教育大学研究報告 教育科学編』, Vol.71, pp.134-138, 2022年.

文部科学大臣提示, 『国立大学法人愛知教育大学 中期目標(令和4年4月1日～令和10年3月31日)』, 2022年.

文部科学大臣認可, 『国立大学法人愛知教育大学 中期計画(令和4年4月1日～令和10年3月31日)』, 2022年.

(2022年9月26日受理)